

瀬戸内国際芸術祭 2019 における対話型鑑賞ツアーの試行

○山本暁美（東京大学大学院）・原直行（香川大学）

Keyword：瀬戸内国際芸術祭、ACOP、対話的芸術鑑賞法、アートツアー、パフォーマンス転回

【はじめに】

瀬戸内海島嶼地域を中心とした3年に一度の国際的な地域芸術祭「瀬戸内国際芸術祭」は、今年で4回目を迎える。初回からの開催地域の一つである豊島（香川県土庄町）は、前回開催時にはすでに世界各国から15万人超の観光客を迎え、「アートの島」として知られるようになった。筆者らは、2017年より豊島在住の観光ガイドと共に観光客を対象とした対話型鑑賞プログラムによるアートツアーを企画し、実施している。本報告ではその実際について述べるとともに、アーリとラースンによるパフォーマンス転回（Urry & Larsen, 2011=加太 2014）との関係について考察する。

今回実施したツアーは、有名な観光スポットを巡る一般的なものではなく、地域における特定な場所に対して制作されたアート作品と、住民が日常的に暮らす地域を対象とした対話型鑑賞プログラムである。このプログラムは、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して美術作品を読み解いていくものであり（アレナス=木下, 2001）、京都造形芸術大学におけるACOP（Art Communication Project）として展開されている。

【ツアー概要】

今回のツアーでは、参加者同士が対話しながら複数のアート作品を鑑賞し、地域を散策する。日程は2019年4月20日、21日の1泊2日、島内の民泊に2グループに分かれて宿泊した。参加者は機縁法による年齢、出身地、職業、趣味等が異なる5名（20-50歳台/女性4名、男性1名）である。プログラムの内容は以下である。

<20日（土）>

12:00	豊島 家浦港集合
12:10~12:45	昼食
13:00~13:30	鑑賞ワークショップ説明
13:45~14:00	唐櫃地区 散策
13:45~14:00	青木野枝《空の粒子/唐櫃》 棚田 散策
15:00~16:00	豊島美術館
16:00~16:45	クリスチャン・ボルタンスキー 《心臓音のアーカイヴ》 王子ヶ浜 散策

（豊島横尾館）

（家浦海岸でカフェタイム）

18:00~ 宿泊先チェックイン

～夕食・自由行動

夜 壇山の夜景 ナイトツアー

<21日（日）>

8:00~8:30 朝食後、自由解散

8:30~10:00 ツアー体験シェア会

プログラムの案内役は、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターと、豊島のイチゴ農家を経たのちに観光ガイドとなったテシマサイト森島氏が務めた。尚、今回は試行のため、参加者は自宅から豊島までの交通費のみ負担した。

【調査内容】

今回の試行に関しては、参与観察（対話的芸術鑑賞過程の記録を含む）、事前事後の質問紙調査、グループインタビューを行っている。グループインタビューからは、観光が従来の観光ツアーとは異なって受けとめられていること（「歴史を知れる、風土、文化、伝統などもキャッチできるのは自分たちが旅行するときの薄っぺらさとは違って根を張った旅行だった。普段いろんなところに旅行に行くが、今回はネットや観光ガイドに乗っているとしか知らないものとは違った。」）、観光の対象を言語化する意義を認識していること（「ひとりで綺麗な景色みても『綺麗だ』と思うけど、それを人と話すことはなかなかない。人の話を聞くと考え直すし、話すことで自分の考えはもっと固まる。」）が示唆されていた。他方、従来のツアーとは違い、能動的に話しをすることに難しさを感じる参加者がいた（「参加するときは『難しいことを話すのかな』と考えるので少し勇気がある。」「『どうしたらよいかわからない』『こんなこと言っているかわからない』という気持ちもある。」）。

【考察】

観光は、観光者が保持するその観光地へのまなざし、観光地の住民による観光者のまなざしへの認識の相互作用

用として考えることができる (Urry & Larsen, 2011=加太 2014)。しかし、豊島におけるアート作品は、従来の観光者による予期を不可能にし、期待を抽象化する効果をもち、そのことは観光地の住民による観光者のまなざしへの認識を難しくする。瀬戸内国際芸術祭のような試みは、まなざしを解放し、創造的な観光の可能性を開く一方、観光地特有の意味を失わせる可能性がある。今回試行したツアーは、対話的芸術鑑賞を利用することにより、アート、地域をより深く理解し、また、その経験を言語化することにより、観光者一般ではなく、観光者個人個人にとっての観光の意味を発見できる機会となりうる。アーリとラーセンは「パフォーマンスが観光の重要な要素」(Urry & Larsen, 2011=加太 2014: 332)であることを指摘している。しかし、そこで挙げられている例は、観光地のパフォーマンスとしてまなざされているものであり、「どういう種類のパフォーマンスが現代のグローバル化するパフォーマンスの代わりになりうるのか」「このパフォーマンスが形を変えてグローバル化と逆に局地化することは想定できるだろうか」「観光のまなざしが本当の局地や日常という地点に向かいつつあることを想定することができるのか」という問いを投げかけている (Urry & Larsen, 2011=加太 2014: 333)。今回のツアーは、局地化するパフォーマンスとして見なすことができる可能性があり、その意味でアーリとラーセンの問いかけへの1つの答えとなりうる。他方、この局地化が現代のグローバル化するパフォーマンスになるのか、そうあるべきかについてはさらに議論の余地がある。

【まとめと今後の課題】

本報告では、筆者らが行った瀬戸内国際芸術祭 2019 に向けて試行した対話型鑑賞ツアーについて、その実際がどのようなものであったかを説明し、アーリとラーセンが指摘する観光におけるパフォーマンス転回との関係について考察を行った。今後、参与観察、事前事後の質問紙調査、グループインタビューのデータを分析し、局地化するパフォーマンスとして観光に対してどのような意味を持つかなど、彼らのパフォーマンスに関する問いについて検討を深めていきたいと考えている。

【参考文献】

アメリカ・アレナス[木下哲夫訳](2001)『みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント』淡交社
Urry, J., & Larsen, J. (2011). *The Tourist Gaze 3. 0.*

London: Sage Publication. [加太宏邦訳(2014)『観光のまなざし』法政大学出版局.]

助成 本研究は JSPS 科研費 基盤研究(C)17K02114 の助成を受けたものである。